〈特集〉

誰と学ぶか――自己・他者・コミュニティ

2020 年代前半を席巻したコロナ禍や、昨今における生成 AI の普及は、教育の方法や学びの場に大きな転換をもたらし、あるいはもたらしつつある。それ以前から進行していた社会的・技術的な変容とあいまって、私たちは、「学ぶ」という営みそのものの形が揺らぐような経験を共有しているのかもしれない。こうした状況下で、他者と空間を共有して学ぶことの意味、さらには、そもそも「他者」とは誰なのかという問題に、改めて正面から向き合うべきなのではないだろうか。

これは学びの場に対する捉え方の変化とも関わっている。かつては、教室という物理的空間を共にし、同じ時間を過ごすことこそが、学びの基本的な形とされてきた。その中では、教師が何を教えるか、学習者が何を学ぶかということに主な関心が向けられていたと思われる。だが、現在では、対面授業とオンライン授業を柔軟に組み合わせたり、国や地域を越えて学び合ったりすることも、もはや特別なことではなくなりつつある。例えば、海外の大学と連携した国際共修授業では、文化的背景の異なる学習者同士が共に学び、日常的に交流する場面がみられるようになってきた。さらには、インターネットと生成 AI の普及は、「学校」「教室」「教師」等といった、これまでの教育システムが自明の前提としてきた事物や枠組を相対化してしまいつつある。狭い意味での技能やコンテンツの習得を「学び」の目標とするならば、これらはすでに必須のものではなくなっているのである。これを踏まえて、根源的に「どこで」「誰と」学ぶのかという問いが、以前にも増して意味を帯びるようになっているといえよう。

実際に、異なる背景を持つ学習者が共に学ぶ場では、共通の理解にたどり着くまでに時間を要したり、意図しないすれ違いが生じたりすることもある。そうした過程においては、聞き手や読み手を意識して言葉を尽くすことや、自明だと思っていた前提を問い直すことが求められる。その積み重ねが、結果として学びの質を変えていくことも少なくない。こ

うした学習者同士の関係だけでなく、学習者と教師の相互的な学びや、教員同士が実践や教育観を分かち合う関係、あるいは、大学が地域社会と関わる中で築かれていく学びの在り方など、「誰と学ぶか」は多層的な問題として浮かび上がっている。これら多様な関係性のそれぞれにおいて、私たちは「自己」と他者がどのように関わり、いかにして互いに学び合うのかという本質的な問いに直面している。同時に、それらはまた、学びの主体としての「自己」への省察にもつながっていくはずだ。こうした経験の積み重ねが、学びの意味そのものを見直す機会となることを期待している。

こうした経験に基づくと、学びとは他者との関わりのなかで芽生え、思索と対話の往還を通して、少しずつ深められていく営みなのかもしれない。だからこそ、「誰と学ぶか」という問いは、学習環境の多様化を超えて、学びの成り立ちそのものを問い直す視座を提示するものになるだろう。

東海大学日本語言文化学系ではこれまでにも、国や地域を異にする他大学との連携や、大学の外に広がる社会との繋がりを重視し、さまざまな教育実践活動を積み重ねてきた。本特集「誰と学ぶか――自己・他者・コミュニティ」では、コロナ禍や生成 AI の普及等を背景に学校教育のあり方が大きく変貌し、また「学校」そのものが相対化されつつある現在の社会において、狭義の教育方法論の枠を越えたより根源的な視点から、「誰と学ぶか」を今一度問い直したい。移動や越境の中で生まれる経験、異なる文化的背景をもつ人々の協働、自己省察的な語りによる探究など、「誰と学ぶか」をめぐる問いが立ち現れる場は、実践と研究の垣根を越えて広がっている。そうしたつながりの中で生まれる学びを見つめ直すことを通して、「誰と学ぶか」という言葉に込められた意味を、多元的な視点から掘り下げていく。教育や研究のあり方を再考し、ひいては、変化の時代における私たち自身の学びの指針を共に探求する契機となることを目指したい。

〈特輯〉

與誰共同學習：自我・他者・社群

2020 年代前期席捲全球的新冠疫情，以及近來生成式 AI 的普及，已對教學與學習之場域帶來了重大轉變，甚至正在持續改變中。這些轉變與原本的社會、技術變遷相互交織之下，或許我們正共同經歷著「學習」這一行為的樣態開始出現動搖。

在這樣的情勢下，我們是否應重新思考：與他者共享空間進行學習的意義，甚至，所謂的「他者」究竟是誰？

這也涉及我們對於學習場域的理解方式之變化。過去，與他人共處於教室這樣的物理性空間，在相同時間內學習，被視為是學習的基本模式。在那樣的脈絡中，教學的重點多半聚焦於教師教什麼、學習者學習什麼。然而，在當今社會，靈活地結合面對面授課與線上課程，或是跨越國界與地域共同學習，已不再是特例。例如，在與海外大學合作的國際共修課程中，可見到來自不同文化背景的學習者共同學習，並展現出日常互動的場景。進一步而言，網際網路與生成式 AI 的普及，使得「學校」「教室」「教師」等在以往的教育體系中被視為理所當然的事物與框架正逐漸被相對化。若將學習的目標限於狹義的技能或知識內容的習得，那麼這些既有的教育傳統要素已不再是必要的存在。基於此，針對「在哪裡」以及「與誰」學習的根本性提問，比起以往更加凸顯其重要性與意義。

實際上，在來自不同背景的學習者共學的場域中，時常需要花費時間才能達成共識，亦可能出現非預期的誤解與錯位。在其過程中，學習者被要求設想聽者與讀者的立場、盡可能清晰地表達自身的想法，或是重新審視原本視為理所當然的前提。這些省思與表達的累積，往往會改變學習的品質。這樣的互動不僅限於學習者之間，也包含學習者與教師之間的互學、教師彼此間共享教學

實踐與教育觀的關係，甚至是大學與區域社會在互動過程中所建立的學習樣態。由此可見，「與誰共同學習」這個問題正以多層次的議題浮現。在這些多樣的關係中，我們面對著「自我」與他者如何互動、如何彼此學習這樣本質性的問題。同時，這些經驗亦引導我們反思作為學習主體的「自我」。我們期盼這些經驗的積累，能成為重新檢視學習意義本質的契機。

根據上述經驗可推知，學習或許是一種在與他者互動關係中萌芽，並透過思索與對話的反覆往返中逐步深化的實踐歷程。正因如此，「與誰共同學習」這個提問，不僅只是對學習環境多樣化的回應，更是引導我們重新審視學習本質的視角。

東海大學日本語言文化學系至今持續重視與來自不同國家與地區的大學合作，並致力於拓展與校外社會的連結，累積了各式各樣的教育實踐活動。在新冠疫情與生成式 AI 普及等背景下，學校教育的樣貌正歷經轉變；「學校」本身的存在也逐漸被相對化的時代脈絡下，本期特刊《與誰共同學習：自我・他者・社群》將試圖跳脫狹義的教育方法論的框架，從根本的視角再次省思「與誰共同學習」這一問題。諸如在移動與跨越國界的過程中所累積的經驗、來自不同文化背景者之間的協同合作，以及透過自我省思敘述所展開的探究等，都是圍繞著「與誰共同學習」這一問題。而展現這一問題的多元場域正逐漸超越實踐與研究之間的藩籬。透過重新審視在這些連結中所孕育出的學習樣態，我們將從多元視角深入探究「與誰共同學習」這一語詞所蘊含的意義。希冀本期特刊除了重新思考教育與研究的方式之外，更能成為我們進一步共同探索在這個變動的時代中，我們自身的學習指引的契機。